



さくら新聞

発行者：NPO法人
下関深坂さくら友の会
下関市横野町1-13-1
TEL:083-258-3277
<http://members3.jcom.home.ne.jp/shms3/sakura/>

明けまして おめでとーございます

(写真は一月十日定例会。笑顔でパツと花咲かせるぞ)



理事長 福富征男

元旦にあたり振り返ってみようと、下関深坂さくら友の会が二〇〇六年三月に発足したときの希望と不安が、ある種の感慨を伴って胸に甦ってまいります。

しかし、今は、この四年間の活動を通して会員相互の間に育まれた強い信頼感で何と心強く居られることか。こんな充実感に満たされて新年を迎えられたことを皆様と共に心から喜んで居ります。

大方の会員は、桜だけでなく、深坂の森全体にもっと責任を持って積極的な役割を果たして行きたいと思っ居られることがわかりました。また、

そういうことを口にできる実力と誇りが、この会に備わってきたことを感じて居ります。

昨年はNPO法人の認証を受けました。今年は、更に一歩前進して、下関市の公営施設を管理する上で必要となる指定管理者に挑戦します。指定管理者になれば、森の家やキャンプ場の管理を請け負うことができます。

昨年は深坂の森の枯木の防止の研究に一歩踏み出した人たちが、竹炭の講習会に参加して、炭焼きに関心を示した人たちもいました。石楠花やいろいろな木々の群落を作りたいという人たちもいます。自然環境の知識を蓄えるのには時間がかかりました。一つの実験に一年はかかるので、成功までの道は遠いと覚悟しなければなりません。失敗の積み重ねこそ貴重な財産です。財産が増えるのを楽しみにしましょう。

理想の里山とは何でしょう。桜、もみじ、野鳥、山野草、昆虫採集、茸狩り、筍や栗など山の恵。子どもたちが、喜んで入りたくなる里山。未来に残したい里山の具体化を目指して、深坂の森全体のランドデザインを描きたい。今年も大いに夢を語り合います。

(平成廿二年元旦)

他団体との交流

NPO法人化後



十月三十一日(土)、しものせき市民活動センターで、下関市市民活動交流会が8団体四二名が参加して行われた。「さくら友の会」からは福富征男、上島政利、西川浩子、野口周三の4名が出席した。午前中は各団体の活動報告が行われ、昼食を挟んで、交流の場が設けられて色々な呼びかけなども行われた。

竹炭焼き講習会

九月十一日、下関市小月(おづき)で炭焼き講習会があった。さくら友の会からは福富征男、平野正、野口周三が出席した。近年、竹の需要がなくなつて、山では放置された竹林が繁茂して、森林が侵され問題になってきている。何とかして、竹林を削減する対策が必要



だ。その一環が竹炭製造運動のようだ。深坂の森には竹はそれほどないが、竹を生かすことを考えれば、助かる人も多はずである。講習会では一日(約七時間)で炭焼き作業を終えることができる小型の昭和窯(しようすけがま)というのを目を引いた。

ボランティア交流

近年ボランティア活動が活発になり、行政もこれらを支援しながら相互にプラスになるように交流を計るなどしているため、色々なところから呼びかけが有り、事務局も頭を悩ましている。一方思わぬ収穫があることもあるので、多くの会員が参加される事を期待している。

桜四方山

「さくら友の会」は色々な事業をしているが、その一つに研修旅行がある。桜に関する我々自身の見識を高めねばならない。昨年は吉野山に行つた。今年は、韓国の鎮海市(チネ市あるいはジンヘ市)に行くことになっている。鎮海市の桜は日本の海軍が最初に植えたところから始まるらしい。一九〇四(明治三七)年の日露戦争のときは、日本海軍は対馬海戦に鎮海市から出撃している。

第二次世界大戦後、日本の象徴である桜は、一時はほとんど切倒されたが、一九六〇年代の半ばから鎮海市出身の在日韓国人を中心に桜の苗木が送られ、桜植樹運動が復活した。現在では三十万本とも言われ、十五万の人口よりも遥かに多いらしい。深坂の森の桜植樹運動も此処を見た人たちが、強く心を揺さぶられたことに始まる。さくら友の会の事務局長は、此処の桜を語る時、「とにかく... (激しい? 沈黙)... 物凄い」と、いつ語らせても同じである。それ以上の言葉が見つかからないらしい。今は世界的桜の名所だ。一度は見ずばなるまい。